

アジアの大学における成績評価方式に展望を示しています。また、卓越した先見性でもって絶対的相対評価の提言を行っています。各大学において、厳格な成績評価を推進するべく奮闘されている先生方にとって、本書はいわば教科書として、さらにQ&Aガイドブックとして心強い支援者となることでしょう。 [(国) 宮崎大学]

◆日比谷潤子氏◆

「ICU特有の教育姿勢である、進級・学内奨学金・留学選抜・教員免許の全てを学業成績で決める『GPA至上主義』は、自分のなすべき未来とそれを実現するためのステップを考え抜くことを学生に期待します。」

先月、Distinguished Alumni of the Year※¹の顕彰を受けた卒業生※²が、受賞にあたって記した文章からの抜粋である。本学では長年GPAを運用してきた。上の一文は、この制度が「学生の履修における自己決定・自己責任の原則という基盤の上に成り立つ」という著者の主張を端的に表している。

本書は、GPAの活用を提唱すると同時に、現在用いられている算定手法の問題点を指摘し、代案を提示している。私を含め、GPA制度を採用している大学関係者が、実際のデータを用いて両者の差異を今すぐ計算してみたくなる内容である。 [国際基督教大学]

※¹ Distinguished Alumni of the Yearの略で、諸分野で社会に貢献した卒業生を表彰する制度。
※² 35期(1991年卒業)の矢野創氏。はやぶさプロジェクトチームの一員。
引用部分は、2011年3月20日に行われたDAY授賞式配布資料より抜粋。

◆山本 寿氏◆

「GPAはユニバーサルアクセス化する大学における共通コードとして機能する」

本書は、昨今GPAについて精力的に執筆、講演活動を重ねてきた著者が講演録と論文、それに資料を追加してまとめたものである。事例紹介や調査報告に加え、様々な論考がバランスよく展開され、誤解を招きがちなGPAに纏わる諸論点が明快に整理される。GPAを希望ある成績評価制度として位置づけ、今後どのように機能し得るか、冒頭のメッセージに象徴される可能性を訴える。

この制度に希望を担保する仕掛けが「functional GPA」である。著者は、現在多くの日本の大学で無自覚、無批判に導入されている既存のG算定法が孕む致命的欠陥を明らかにし、代替案として上記f GPAを提唱する。評者は2002年、従来の算定法の欠陥に気づき、学内で議論し尽くした。「f GPA＝機能するGPA」は同志社女子大学に2004年から導入されたものと同一である。本書の資料的価値を高める上でもその事実は明白に記されて欲しかった。細部ではあるが、「必修科目とGPA」、「再履修とGPの改善」の内容には異論がある。

しかし、全体の論理展開は鋭く、目を啓かれる内容が大半である。GPAを巡る混迷状況の中、これだけ問題の核心を突いた文献は見当たらない。本書が広く日本の大学人に読まれ、GPA再考の手引きとして機能することを祈る。 [同志社女子大学]

〈新刊のご案内〉

高等教育ハンドブックシリーズ第⑥集

成績評価の厳正化とGPA活用の深化

～絶対的相対評価／教員間調整／functional GPA～

半田 智久 著 お茶の水女子大学 教授

本書の構成

- I 成績評価の厳正化とGPA活用の深化～セミナーライブ版
- II 機能するGPA～論考スタイル版～
- III 資料編～各大学のGPAの算出方法と活用の事例～

● 執筆者プロフィール ●

半田 智久 (はんだ もとひさ)

1957年生まれ。1987年東京大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程満期退学。信州大学講師・助教授、宮城大学教授、静岡大学教授を経て、現在、お茶の水女子大学教育開発センター教授。
〈主な著書・論文 (GPA関連)〉
『知能のスーパーストリーム』(1989 新曜社)、『パースナリティ：性格の正体』(1994 新曜社)、『知能環境論』(1996 NTT出版)など。
「GPA制度に対する関心と導入の状況」(静岡大学教育研究 2006)「GPA制度：カテゴリー錯誤の問題と解決」(大学教育学会 2006)「GPA制度の研究 functional GPAに向けての提言(第10版)」お茶の水女子大学教育開発センター報告書 2010)など。

高等教育シリーズ第25集 “教育責任”と“質的管理”を担う大学・大学院へー ● 発行 2003年4月30日 ● 体裁 A4判 196頁

成績評価の厳格化と学習支援システム

～GPA運用と学生の履修管理力の育成～

- I. 厳格な成績評価と教育インフラの整備 ～理念、目的、活用の意義、米事例
絹川 正吉 / 国際基督教大学 学長 諸星 裕 / 桜美林大学 副学長・教授
- II. GPA運用と学習支援システムの実践 ～評価基準、運用方法、具体策としての各種制度
高村 麻実 / 桜美林大学 教務部長・文学部助教授 古川 進 / 山梨大学 工学部教授・前教務委員長
吉原 正彦 / 青森公立大学 経営経済学部長・教授 中村 尚五 / 東京電機大学 情報環境学部長
森末 道忠 / 広島市立大学 学長補佐・情報科学部教授 白川 友紀 / 筑波大学 機能工学系教授・アドミッションセンター
英 崇夫 / 徳島大学 工学部教授 山本 浩 / 上智大学 学事部長・文学部教授
- III. 資料編
A 関連答申等 B 教育充実・成績評価への取組み (所属：執筆時／敬称略)

お申込み・お問合せ先

地域科学研究会・高等教育情報センター
URL <http://www.chiikikagaku-k.co.jp>

東京都千代田区一番町6-4 ライオンズ第2-106
TEL (03)3234-1231 FAX (03)3234-4993
E-mail kkj@chiikikagaku-k.co.jp

キリトリ線 (※申込の折は必ずお送りください)

申込書		年 月 日
<input type="checkbox"/> ハンドブック6集	成績評価の厳正化とGPA活用の深化	定価 6,400円 (本体6,095円、送料込)
<input type="checkbox"/> 高等教育シリーズ25集	成績評価の厳正化と学習支援システム	定価 19,000円 (本体18,095円、送料込)
勤務先	◆FAX・メールまたは郵送にてお申し込みください。 ◆書店を通して購入される際はこの申込書を書店にお持ち下さい。	
所在地 〒	[書店購入用] [取次] 東京官書普及 [版元] 地域科学研究会	
申込部課名	ハンドブック6集 ISBN978-4-925069-35-9 高等教育シリーズ25集 ISBN94-925069-68-8	
申込連絡者		
TEL	FAX	
E-mail		
必要書類	<input type="checkbox"/> 見積書 <input type="checkbox"/> 請求書 <input type="checkbox"/> 納品書 <input checked="" type="checkbox"/> を入れて下さい <input type="checkbox"/> 所定用紙 (ご送付下さい)	

□厳格な成績評価の切り札であるGPAの算定手法に致命的な欠陥

現在、GPA制度を運用している大学の約9割において、GPA算定方式に致命的な錯誤・欠陥があつて、原成績からの“順位のかく乱”“成績ロンダリング”が発生している。半田氏の600人シミュレーションによれば、かく乱発生率9割以上、10位以上の変動4割超、最大で88位の下落という、恐ろしいロンダリング振り。

□GPA活用による学生の不利益・異議申立てに、大学は耐えられない

GPAの数値は重要なメルクマークとして、「奨学金・授業料免除の選定」や「進級・退学判定」の基準、さらには卒業時の成績証明の総合評価として、活用されている。これは、厳格な成績評価の対極にあつて、“成績証明の説明責任”を果たすものではない。

□原成績素点のA・B、秀・優…等のレターグレード(LG)化は可

100点満点等の原成績を5段階で等級評定化し、A・B・C・D・E (又は秀・優・良・可・不可)のレターグレード(LG)で成績表示することは可。

□LG(級)からのグレードポイント(点)での置き換えが元凶

問題は、グレードポイント(GP)の算定にあつて、順序尺度であるLGを、単純に4・3・2・1・0と置き換えていることにある。

回 覧

待望の新刊
好評発売中

●発行 2011年3月25日 ●体裁 B5判230頁

推薦のことは

安藤 厚氏 (国)北海道大学名誉教授 元 高等教育機能開発総合センター・高等教育開発研究部長
坂本 明雄氏 (公)高知工科大学 情報学群学群長・教授
関根 秀和氏 大阪女学院大学・短期大学 理事長・学長
武方 壮一氏 (国)宮崎大学 教育・学生支援センター准教授
日比谷潤子氏 国際基督教大学 学務副学長・教授
山本 寿氏 同志社女子大学 生活科学部教授

□GP=(TS-55)/10が的確～原成績からダイレクトにGPを算出、

半田氏は、原成績素点からLGを介さずに、ダイレクトにGPを算定する方式として、GP=(TS-55)/10を提起している。つまり、GPの最大値が「4.5」が的確であることを明晰に論証。

□半田氏の“fGPA”は、通例GPAとの互換性ととも

に世界標準
さらに、半田氏の提唱する“fGPA”は、通例のGPAとの高い互換性を持つとともに、国外調査による検証を踏まえて国際通用性、さらにはグローバル標準となる卓越性がある。

□成績評価の厳正化のためのGPA深化の必読ガイド

GPAの算定方式の見直し、または導入を検討中の大学にとって、本書はまさに必読のガイドである。

地域科学研究会・高等教育情報センター

成績評価の厳正化とGPA活用の深化 目次

まえがき

I. 成績評価の厳正化とGPA活用の深化 ～GPA算定方式の革新／絶対的相対評価～

はじめに

第1章 厳格・厳正な成績評価～教育の質保証とその約束

1. 厳格な成績評価～その経緯と背景

- (1) 大学審議会の1998年答申による提示
- (2) 中央教育審議会の2008年答申による再声明

2. GPAの諸効能と革新性についての確認

- (1) GPAとはどのような性質をもった performance Index なのか
 - 1) 単なる成績の平均点とはわけがちがう
 - 2) GPAと単位の意味の実質化
 - 3) GPAのスコアが高くなる学生の学修特性

3. 厳格・厳正な成績評価は教育の質保証の基本要件

- (1) 厳格な成績評価と質の約束

4. 現況のGPA算定が孕んでいる問題

- (1) 尺度の範疇錯誤と成績ロンダリング
 - 1) 評価と評価尺度の厳格・厳正さ
 - 2) 成績評価にみるバナキュラーな特性とその価値

第2章 諸大学におけるGPAを中心とした成績評価制度の運用とその課題

1. GPA制度の導入を検討ないし気にしている大学の参加者から

- 1) 関西外国語大学

2. 近々GPA制度を導入する大学の参加者から

- 1) 東北学院大学
- 2) 南山大学
- 3) 麗澤大学
- 4) 淑徳大学
- 5) ヤマザキ動物看護短期大学

3. すでにGPA制度を運用している大学の参加者から

- 1) 法政大学
- 2) 高知工科大学
- 3) 九州共立大学
- 4) SK大学
- 5) 同志社大学
- 6) 立命館大学

4. 12大学のGPA制度への取組み～総評として

第3章 堅牢にして柔軟かつ継承性のある成績評価システム～ソリューションと効果発現に向けて

1. GPA算定に潜む問題の解決 ～原成績のリニア変換による最適互換性を備えたfunctional GPA～

- (1) 「使えるGPA」～functional GPA
- (2) 厳格な評価指標としてのfunctional GPA
- (3) カラーコードベンチマークシステムとの併用

2. 教員個々の裁量行為と成績評価

- (1) 個々の教員が評価する原成績のすがた
- (2) 絶対的相対評価とはなにか

3. スマート・スコアリング・ツールの活用と提供

～テスト運用のためのExcelでのフリーウェア～

4. 国際的な通用性をもった成績評価制度としての今後の展望

II. 機能するGPA～functional Grade Point Average (fGPA)～

はじめに

1. なぜ、いまGPAなのか～GPA制度導入の背景

2. GPAに対する批判的見解や誤解含みの解説を超えて

- (1) 厳格な成績評価とGPA
- (2) GPAと退学勧告の関係
- (3) GPAという代表値がもつ意味
- (4) GPAの通用性

3. GPA制度導入にあたり留意すべき問題とその解決

- (1) 何が問題なのか
- (2) シミュレーションによる再検証
- (3) 問題見過ごしの原因
- (4) 問題の解決方法
- (5) 算定値の互換性の確認

4. functional GPAの効能

- (1) 単位の意味の実質化～学修の意味
- (2) 成績不振に対する対処、および学修勸奨
- (3) 科目間の成績評価基準のばらつき
- (4) 授業時間外での学修を動機づける
- (5) 成績をもとにした学内選考の際の統一基準
- (6) 単位互換や転学などの際の基準として

5. 機能するGPAの効能発揮を側面から支える付帯的な整備課題

- (1) 学修時間数が同等の科目間における単位数格差
- (2) GPA制度と学生の履修における自己決定・自己責任の原則
- (3) 履修決定期間
- (4) 習熟度別クラス編成や科目難易設定と重みづけGPA
- (5) 必修科目とGPA
- (6) 再履修とGPの改善
- (7) 合否判定の二重評価とGPA
- (8) 自由科目と学生の申告によるGPA算入除外
- (9) 学生の申告による履修取消
- (10) GPA制度とオンラインリアルタイムシステム

おわりに

III. 資料編～GPA制度の運用と活用の事例

- 1) 北海道大学
- 2) 北海道工業大学
- 3) 青森公立大学
- 4) 共愛学園前橋国際大学
- 5) 桜美林大学
- 6) 国際基督教大学
- 7) 上智大学
- 8) 同志社女子大学
- 9) 徳島大学・工学部
- 10) 西南女学院大学・短期大学部
- 11) 宮崎大学

編集・制作をおえて



図4 通例のGPA算定方式による成績ロンダリング

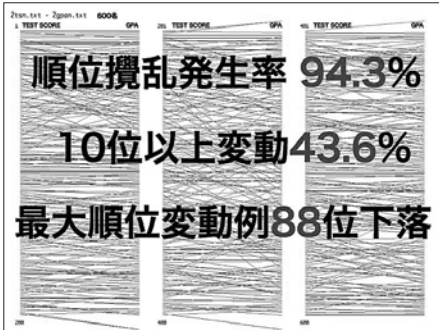


図5 GPA順位攪乱状況のシミュレーション(600人)

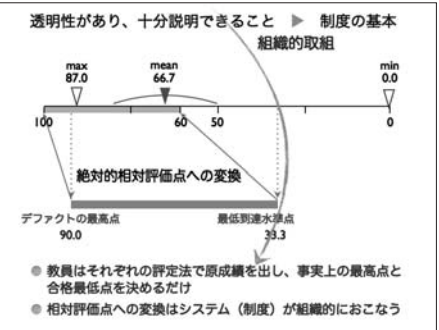


図12 絶対的相対評価の算定プロセス

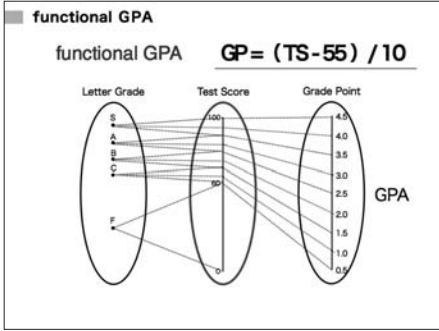


図7 functional GPAの算定公式

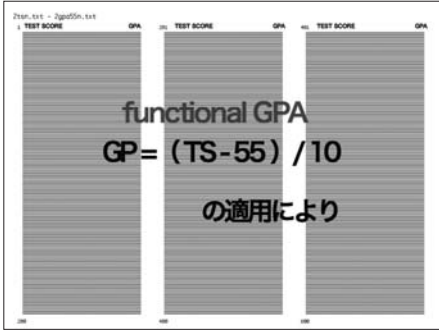


図8 functional GPAの厳正性～攪乱の解消

GPAと単位の意味の実質化					
単位数の違いはその大学のカリキュラムポリシーを反映させる					
哲学		卒論		英語	
Pさん	B	B	S	...	卒業
Oさん	B	A	C	...	卒業
GP					
Pさん	2.0×2	2.0×8	4.0×1	=	2.18
Oさん	2.0×2	3.0×8	1.0×1	=	2.63
fGPA					
Pさん	1.5×2	1.5×8	3.5×1	=	1.68
Oさん	2.4×2	3.4×8	1.4×1	=	3.04

表6 原成績を反映するfGPAの例-2

推薦のことは

◆安藤 厚氏◆

半田さんのfunctional GPAの本が出た。GPA制度の解説書として、必読文献の一つになるだろう。

100点満点の「原成績」を5段階のGPに置き換えて平均点を出すときに生じる席次の攪乱(成績ロンダリング)の問題は、GPA制度を運用している各大学で、教育現場の実状とデータに基づいてきちんと検証されなければならない。fGPAの有用性はそこから自然に判断されるだろう。

国内外のGPA制度の現状が実例をあげて詳しく紹介されている点でも、本書の価値は高い。GPA制度を新たに導入するにも、制度を見直すにも、貴重な情報となる。

「GPAのスコアが高くなる学生の学修特性」の一節は、「ユニバーサル段階」における教育改革のツールとしてGPA制度の大きな可能性を簡潔に示している。

GPA制度に対する賛否の議論は山を越したが、教育と学習の現場でこの制度をいかに上手に運用し成果を上げるかは、これからの課題である。本書はそのために貴重な手引きとなるだろう。

〔(国)北海道大学〕

◆坂本明雄氏◆

本書は、GPA制度運用にあたって陥りやすい誤解や欠点をわかりやすく解説し、この制度自体が抱えている問題点を鋭く指摘している。また、国際的な動向を欧米やアジア各国についての緻密な検証に基づいて述べ、GPA先進国の単なる追随ではなく、日本独自の進化を提唱している。その具体例として、任意の値の幅をもつ成績評点を合格点60、満点100の値に換算する絶対的相対評価法および、その結果をGP (grade point) に換算する式を提案している。ここで得られたGPに単位数の重み付けをして平均値をとったものが機能するGPA (functional GPA) である。いずれも単純な一次変換式であり、その意義を多くの教員は納得するであろう。

なお、本書のベースとなったセミナーのタイトルは「成績評価の厳格化とGPA活用の進化」であるが、「厳正化」および「深化」とすることで本書の内容を的確に表現しタイトルになっている。

〔(公)高知工科大学〕

◆関根秀和氏◆

大学教育に対する期待がすさまじく多様化し、それに伴って制度や教育行政が激しく揺れる日々が続いている。そこでは、かつての「深度の深い学究が質の高い学習を自ずから生みだす」という予定調和に立ったいわば「自生する学習」という視点に期待することは、ほとんど出来なくなっている。

大学が、「教育」という使命から、学生のニーズに応じる「学習支援」へと地スベリを起こして、いたずらに苦闘を重ねることになった。

しかし、さあればあるほど「学習支援」の本質は、学習への主体性を一人ひとりの学生の内面にいかにして成立させるかにあるはずで、最も重視されなければならないのは、学生自身が自分の学習のクオリティーを丁寧に確認し、明日の自分の学習への期待を見出していく実効性のある「学習ポートフォリオ」を、いかに構成するかにある。

その意味において、GPAをその本質から捉え返し、単なる技法としてではなく、学習支援文化としてのGPA、そうしてそこから教育の質保証を実現していく「学修ベンチマーク」を予見する視点に立たされるという強い衝撃を本書によって与えられた。大学教育に使命を感じる教員及びスタッフにとって、新たな展望を与えられる貴重な一書である。

〔大阪女学院大学・短期大学〕

◆武方壮一氏◆

大学審議会(1998)の答申以降、GPAを導入する大学がじりじりと増えてきた当初から、半田先生はGPA算定方式の錯誤・欠陥に警鐘を鳴らしてこられました。地域科学研究会をはじめ、先生の企画するセミナーでは、厳格な成績評価をめぐる、教員、職員、ひいては大学の役員までを巻き込み、高等教育の将来に向けて活発な議論が行われています。

この度上梓された著書において、われわれは半田先生の成績評価とGPA研究の成果・提言を、いわば大学文化論を受講しているかのような感覚で享受することができます。GPを4・3・2・1・0とする方式がはたして国際的通用性の要件を持つのかというテーマに、世界35ヵ国、1,000の大学に対するアンケート調査から検証を行い、

〔Q&A (11項目)〕